

活動報告書

報告者氏名： 山本一寿 所属：大阪府立視覚支援学校 記録日：2013年 2月27日

【対象児（群）の情報】

- ・ 学年
高等部専攻科 2年 19歳
- ・ 障害名
全盲
- ・ 障害と困難の内容
出生時より全盲

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
全盲生徒が、学校の近くの目的地まで iPhone のナビゲーション機能により、介助なしに行くことができるかどうかを試行する。
- ・ 実施期間
7月 2日 S図書館
7月 25日 N高校
12月 20日 JR S駅
- ・ 実施者
山本一寿
村江鉄平（視覚障害者生活訓練等指導者 歩行訓練士）
- ・ 実施者と対象児の関係
授業の担当教員

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

対象生徒は、学校の登下校は自宅よりバス・電車を乗り継いでいる。登校にかかる時間は、約1時間。単独での登下校が可能になって、6年目である。今まで一度も行ったことのない場所には、介助者の援助がいる。たとえば駅構内は駅員に援助を頼み、駅を出ると、通りがかった一般の方に援助を頼んで目的地まで行っている。

・活動の具体的内容

iPhoneに搭載されているGPSナビゲーション機能を、歩行に使えないかという事から本試行に至った。利用したマップはiOS5に付属するもので、視覚障がい者用の音声ガイド機能であるVoiceOverを用いて利用できるものであった。マップは、目的地までの経路を示してくれ、進む方向や曲がり角までの距離を表示するが、信号のない場所で曲がったり、経路上は曲がり角なのに、曲がり角であることを表示しない場合があった。

方向については、視覚障がい者用に作成されたV-Compassという、方向や歩いた歩数を音声で読み上げてくれるアプリを利用した。ただ実際には、歩数は本人が数えたほうが分かり易かったので、今回の試みでは本人が数えた歩数でおおよその距離を把握した。

目的地は今まで一度も行ったことのない最寄りのN高校正門とした。目的地は、本校校門から距離は約450mで、曲がり角は2つあった。ルートを間違えることはなく、目的地にたどりつくことができた。入り口の場所がどこにあるのかは、生徒の声が聞こえたことや、生徒が正門を開く音が聞こえたことから、位置を把握することができた。

・対象児（群）の事後の変化

以下に、本人の感想を書きます。

全盲にとって、「目的地までのルートが把握できること」は、非常に画期的である。以前は、駅から離れた施設まで援助を依頼する場合でも、相手の方に完全に任せてしまうため、かなりの迷惑をかけていた。しかし、マップを使うことで、相手の方にある程度ルートを伝えておく、あるいは画面を直接提示することで、お互いの負担はかなり軽減されるに違いない。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

iPhoneは、今まで知らなかった、また行けなかった場所への距離と方向を示し、実際にナビゲーションを音声にて行うので、事前に行う目的地への情報収集に有力なツールであった。

歩行者に高い歩行能力と援助依頼能力があれば、ある一定程度、目的地まで近づくことができるが、これだけの情報量では目的地に正確に到着することはできない。このマップでは、信号のある交差点の位置や広い道の左側か右側かどちらを歩いているかわからない、歩数を数えることによる安全確認に注意を注げないなど、安全な歩行するには多くの問題点が見られた。またGPSによる位置情報は大きな誤差が生じ、表示では隣の通りを歩いていることもあった。

・その他のエピソード

本人の感想からわかるように、現地で初めて会った相手に対して援助してもらおうということが、相手に迷惑をかけているという意識は強い、このような意識が余計に全盲の方の外出が難しくなる一つの原因かと思われる。迷惑をかけているという意識がiPhoneを利用することによって減るならば、それも一つの機器を利用する利点だと思われる。

